

審査の結果の要旨

氏名 酒井恵子

本研究は、E. Spranger が提唱した価値論に基づき、理論、経済、審美、宗教、社会、権力という6つの価値志向性に関する心理尺度の構成を通して、価値志向性という概念の構造を明らかにしようとする試みである。

Spranger の価値論に基づく心理尺度の構成は、G. W. Allport らによる "Study of Values" を含め、すでにいくつか存在する。しかし、それらは、想定された価値志向が明確な6因子構造として見出されずに終わっており、また、文化的に高度な内容の項目を多く用いたために、一般の人々における価値の測定にはそぐわない等の問題点があった。

それらの試みに対し、本研究ではまず、第1章において、価値を志向する精神作用から6つの基本的価値志向性を抽出している Spranger の哲学的記述にまで遡及することによって、そこに因子分析や項目反応理論に通ずる考え方があることを見出している。すなわち、個々の体験やパーソナリティは個別性、複雑性を有しているものの、必要にして十分な精神作用の組合せによってとらえられ、それらの基本的精神作用を「孤立化」し「理念化」することが必要であるという Spranger の主張は、心理測定では、因子分析法に通ずるものであること、また、ある価値に対する素朴で未発展な形態から、高度に発展した極限的な形態に至る推移を想定している点は、ガットマン尺度に対応づけられることが明らかにされる。

第2章では、項目の選定や修正を繰り返すことで、6因子構造をなす項目群を構成することができ、その過程を通じて6つの価値概念を区別し明確化することが可能であることを示している。続く第3章では、大学生の被験者が Spranger の理論を通読しただけの段階では、明瞭な6因子構造をもつ項目群を作成することができないことを明らかにし、項目作成者自身の価値態度によって内容が影響されることを示した。ここでは、それぞれの価値観を測定するために被験者が作成した項目を詳細に分析することで、概念の個人差とその背景についても考察している。こうした綿密な尺度構成の手続きと考察は、従来の価値志向性尺度の試みが不満足なものに終わっていた原因について大きな示唆を与えるものといえる。

また、第4章では、項目反応理論を適用して、それぞれの価値志向につき困難度の低い項目から高い項目に至る1次元的なガットマン尺度をなす項目を選定することで、価値の発展の様子を具体的に表現している。さらに、第5章では、こうした心理測定論的な方法で見出される項目間順序関係が、一般の人々にも認識されているかどうかを、項目困難度を判断させる課題を通じて検討している。「項目困難度」という項目反応理論の概念を教示によって理解することの難しさもあり、各価値に対する1次元的发展を了解することは困難であるという結果を得ている。

以上のように、本論文は、Spranger の理論を単に応用して尺度を作成したものではなく、尺度構成という心理測定論的な方法による検討を加えることで、価値志向性の概念を明確化したものであり、その哲学的考察や作成された心理尺度は、パーソナリティの相互理解、自己理解において学術的に大きな意味をもつものと評価される。よって、博士(教育学)の学位論文として十分優れたものと認められる。